

認識論の規範性について

麻生尚志 (Takashi ASO)
北海道大学大学院

クワインの議論を契機とし活発に論じられるようになった認識論の自然化であるが、認識論を自然化してしまつては、認識論の規範的側面が失われてしまう、というのが認識論の自然化を阻んできた大きな論点であった。それにたいし、マッフィなどの論者は、認識論が自然化されても、認識論の規範的側面は仮言的規範として保持可能であるという主張を行い、認識論の自然化を推しすすめた。仮言的規範とは、定言的規範とは異なり、なんらかの目的が設定された上で、その目的をかなえるにはどのようにすべきか規定するものであり、あくまで道具的理性の枠組みでのみ規範的であるにすぎないような規範である。

では、はたして、認識論の規範的側面は、そうした仮言的規範によって汲み尽くされるのであろうか。それは、そもそもの認識論の規範的側面としてどのようなものを捉えていたのかに依じて、答え方が異なってくる。すなわち、仮言的規範によって認識論の規範的側面は汲み尽くしうると答えるとするれば、その場合そもそもの認識論の規範的側面として限定的なものを考えていたと看做しうるし、また、仮言的規範によっては取りこぼされてしまうと答えるとするれば、そもそもの認識論の規範的側面としてより大きなものを考えていたと言えよう。

そこで、今回の発表では、マッフィやヤンヴィッドなどの自然化論者の提示している仮言的規範がどのようなものであるのか子細に検討することを通じて、それまでの伝統的認識論が備えているとされた認識論の規範的側面とはどのようなものであるか明らかにしたい。すなわち、マッフィなどの論者の提示している仮言的規範が、どのような役割を果たしており、くわえて、どのような役割は果たすことができないのか、を検討することを通じて、自然化される以前の伝統的認識論の規範的側面を考察にしていく。もし自然化される以前の伝統的認識論の規範的側面が、仮言的規範によって汲み尽くされるとすれば、仮言的規範とまさに同じような役割を果たしているものとして伝統的認識論の規範的側面が明確化される。一方、もし仮言的規範では不十分だということならば、伝統的認識論の規範的側面とは、はたして仮言的規範では代替できないどのような役割を果たすものなのか、またそうした規範性の要求は過大な要求ではないのか否か、を明らかにしていきたい。